

# 日本における感染症死亡の時系列傾向の分析

Analyzing the trend of infectious disease death in Japan

西浦 博、木下 諒（北海道大学大学院医学研究院）

Hiroshi Nishiura, Ryo Kinoshita (Hokkaido University)

nishiurah@med.hokudai.ac.jp

## 背景

日本は第2次世界大戦後に人口転換が素早く進んだ国として知られ、少死の傾向の背景として疫学転換、特に感染症による死亡者数が激減したことが広く知られている。感染症による死亡者が顕著に減少する傾向を受けて、多くの医学専門家の間では近い将来に感染症の教科書を開かなくても済む時代が来ると考えた。しかし、感染症が疾病構造の中から完全に排除されることはなく、むしろ高齢社会の背景を受けて新たな感染症疾病構造が構築されようとしている。

本研究の目的は感染症死亡の人口転換後の特徴を把握するために、日本における感染症死亡の時系列傾向の分析を行うことである。

## 方法

人口動態調査に基づく死亡票を用いて、原死因を感染症とする死因別の粗死亡率および年齢調整死亡率を分析した。がんの中でも特定の感染症の寄与割合が高いものは感染症に準じるものとして分析をした。各年の人口は、5年毎の国勢調査人口とその間を線形補完した人口を用いた。

時系列の年齢調整死亡率はジョインポイント回帰モデルを用いて傾向の有無を調べた。1世紀以上の長期時系列と1972年以降の時系列の両方を検討したが、いずれも長期にわたるため変化点の数は固定せずに分析を進めた。

## 結果・考察

高齢者の原死因になりやすい肺炎と敗血症の報告数が粗死亡率および年齢調整ともに2000年以降に増加傾向が顕著であり、高齢社会の原死因として日和見感染症を含む細菌感染症が重要な役割を果たしていることが示唆された。

輸血や注射針の再利用等に伴う肝炎ウイルスの新規感染者数が減少した背景などを受け、たまためか、肝炎、肝硬変および肝がんの上昇傾向は既にとまり、減少傾向となった。他方、子宮がんは1990年まで減少傾向にあったが、その後から上昇傾向が続いており、人口転換に伴う感染者の発病が影響しているものと考えられた。

胃がんは漸減傾向にあり、水衛生状態の改善に伴うヘリコバクターピロリ菌の新規感染者数の減少に伴って、それ以外の原因（食事・喫煙など）による胃がんのみが残った状況

が続いたものと考えられる。

米国ほかの先進国で報告されているようなベクター媒介疾病の顕著な上昇ではなく、そもそも絶対数の少ない HIV/AIDS 等の性感染症が原死因に影響を与えていることも少ないなど、日本独自の感染症死亡の傾向が明らかになった。今後、肺炎による死亡はますます重要性を増すものと考えられ、その分類を含む疫学調査を死亡者を対象に実施し、どのような臨床型（例、誤嚥性肺炎）が死亡に寄与しているのかを調査することが重要と考えられた。

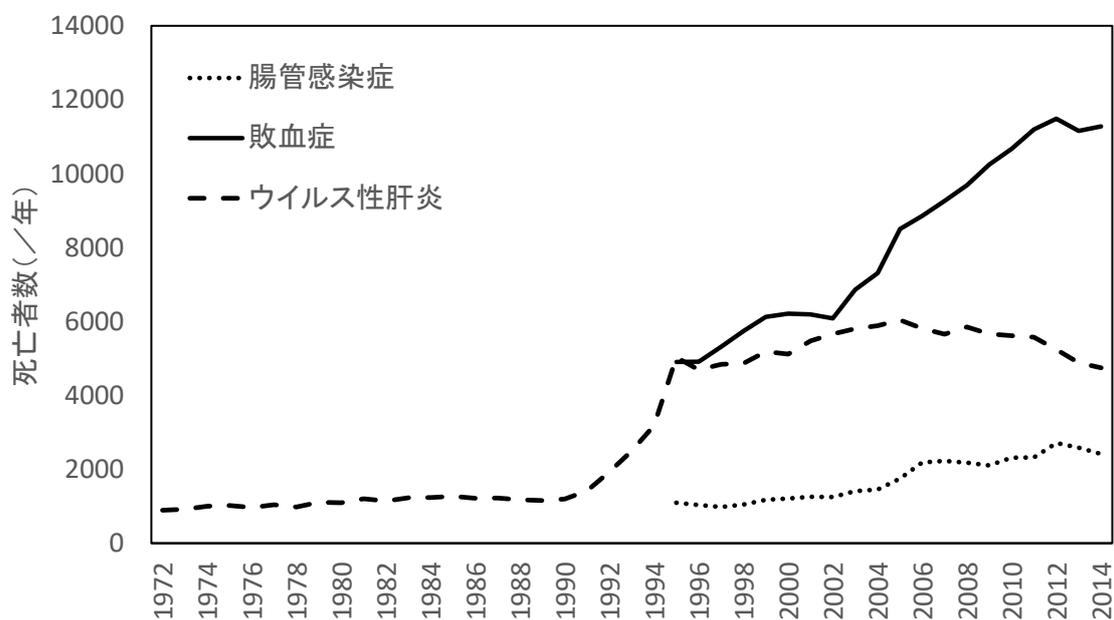


図. いくつかの典型的な傾向を持つ感染症死亡